

ふゆさんが笑った

歯科往診がまだ知られていなかった頃。若き歯科医伊田は依頼を受けて初の往診に向かったが……。

歯科往診の黎明期に書かれた日本初の歯科往診小説を再刊。

ふゆさんが笑った

飯田恭生

往診ケース第一号

木村ふゆ 七十二才
脳血栓による下半身及び左半身不随
障害者認定第一級

1、

「伊田先生、寝たきり老人、やってみない？」

昭和五十九年春の港北区歯科医師会の親睦旅行は、一泊二日の熱海行きだった。旅館の浴衣に着替えてリラックスし、夜の宴会も盛り上がった頃、あちこちにビールを持っていては諸先生がたと談笑していた会長が、今度は僕の所へやってきてビールを勧めると、そう言った。

「……寝たきり老人、と言いますと……」

余りにも唐突な話だったので、グラスを持ったまま僕は一瞬戸惑った。

「ウン。寝たきり老人の往診をするんだ」

会長はごく軽い世間話でもするよな口調で付け加えた。

「はあ……」

僕はそう言ったきり黙り込んだ。——とんでもない話を持ってきた。それが僕の偽らざる気持ちだった。第一、医者の方診ならともかく、歯科医の方診など聞いたことがなかった。確かに、医科に方診があるのだから歯科に方診があってもおかしくはない。そう言う理屈はわかる。しかしそれはあくまでも机上の理論であって、実際臨床で毎日を送っている立場から言うと、余りにも難問が多すぎた。

会長は寝たきり老人の方診をすると言う。——つまり老人の家まで行って、まあ老人だから義歯か何かを作ろうと言う話なのだろう。でも、歯が一本も残っていないならば総義歯を作ることになり、型を取って作ればいいのだから、まだ何をすべきかの見当は付くもの、もし歯が残っていてその治療が必要だったらどうするのだろうか。……そうだと、歯をどうやって削る？ 道具は？

それに、そう言う老人だから、色々と病気も持っているだろうし、血圧も治療に適さないほど高いかも知れない。いやいや、いつもはそんなに血圧が高くなくても、歯科治療をした途端、緊張で血圧がガンと上がることであった。麻酔一本打っただけでショックを起こして死ぬことも……。それだけじゃない。総義歯の印象を取る（口の中の型を取る）時に息が詰まって窒息死の可能性だって……。などと、僕の頭の中では、嫌な想像ばかり

がぐるぐると回転した。

「そんなに難しく考えることはないよ、先生。確かに大変なケースはあるけど、最初はそんなのは回さないからさ。だからやって見ない？」

会長は僕の考えを見透かすようにそう言うと、酒で赤くなった顔いっぱい笑みを浮かべ、しきりに僕を促した。

「ケースを回す、と言いますと……」

どうも簡単に断れるような雰囲気じゃないな、と観念した僕は、とにかく話だけでも聞いてみることにした。会長は、やっと乗ってきてくれたなと言う顔で満足げにウンウンと二度ほどうなずくと、今度は恐ろしく真面目な顔つきになって話し出した。宴会用の顔ではない。仕事用の顔だ。僕もつられて膝を乗り出した。

「……今、日本全国に、いったいどのくらいの寝たきり老人がいると思う？」

会長の質問に、僕は、さあ？ と首を振る。そんな僕に、会長は大きく片手を開いて突き出した。「ウン、全国調査ではね、五十万人くらいって言ってたかな。細かい数字は忘れたけど、大体そのくらいだったと思う。でもね、それは表に出た数字であって、実際はそれ以上、もしかすると、その倍の百万はいるかも知れない」

急に五十万だの百万だの言われても、僕にはちっとも実感が湧かなかった。

「はあ、そんなにいるもんですか……」

と、自分でも恥ずかしくなるほどの間の抜けた声を出したただけだった。

「いるとも。ただそう言う人たちは社会の表面に出てこないものだから、我々が知らないだけの話さ。……伊田先生、我々歯科医は普通の職業より少し収入がいいもんだから偉そ

うな顔しているけど、恐ろしく無知な人種だと言うことを知らなくちゃいけないと思うよ。人の口の中は良く知っているかも知れない。でもそれ以外のことは？」

「確かにその通りかも知れませんか」

僕はあっさりと自分の無知を認めた。学生の頃はよく本を読んだ。友人と人類の未来について議論したこともあった。自分の無限の可能性を謳歌していた。ところが今は毎日の診療に追われ、一日がつつがなく終り、かつ収入が上がることだけを願う事なかれ主義者に成り下がっている。そこには自分とせいぜい家族のワクの中で完結する狭い世界観だけが残り、怠惰に生きる自分自身の姿しか見つけることはできなかつた。おまえは無知だ、そう言われても反論することはまったく不可能と言えた。

「診療所に来る患者さんは、言ってみれば健康な人なんだ。ほとんどの人が五体満足で自力で治療に来れる人だ。じゃ、そうじゃない人はどうだ。体が動かせない人は？ 先生の所でそういう人を治療したことはあるかい？」

「車椅子で家族の方が連れてきたケースはいくつかあります。僕が開業したのが五十四年ですから、五年間で平均して一年に一ケースか二ケースですね」

「そんなもんだと思う？ そういう人たちがそれだけしかないと思う？」

「いいえ」

「だろう？ じゃ、も一度さつきの質問だ。そういう人たちは一体どうする？」

会長の質問はただ日々を怠惰に生きてきた僕の心に鋭く突き刺さった。いくら自分が馬鹿でも、そういう人たちがいないと思っていたわけではない。ただ見ようとしなかったのだ。面倒臭いから、見るのを避けて過ごしてきたのだ。

「わかりません」

僕はうつむいて答えた。会長の視線が恐くて下を向かざるを得なかった。
「あきらめてるんだ、そういう人たちは」

会長は痛恨に満ちた声で、吐き捨てるように言った。「家族の人が手伝って車椅子で治療に連れてってもらえる人は、本当に幸せな人だと思う。それにそういう人は、車椅子を使っていると言っても、ベッドから車椅子までくらいならどうにか動けるような人だ。それよりも症状が重い人は、もうどうしようもない。寝たきりで自分の身体さえ動かせない人は、はっきり言つてすごく重たいんだ。車椅子まで運ぶのさえやっとならしたら、家から外に出して診療所まで連れていけると思ukai? もしそうできたとしても、歯科の治療自体回数がかかる。そしてその本人も、家族に毎日負担をかけているという負い目がある。これ以上の無理はさせられないと思う。だから我慢してしまふ。そういう人たちが我々歯科医の目の届かない所にいっぱいいるんだよ」

会長はここまで言うと言つと溜め息をついた。「……そういう人たちの口の中っていうのは……、まあ行つてみればわかるけど、悲惨だよ。原形をとどめていないボロボロの歯。まるで合っていないガタガタの入れ歯。当然固いものなんて噛めないから、食事は流動食に近いものになる。一生懸命作ってくれる家族の方には悪いんだけど、お世辞にもうまそうだなんて言えやしない。だけどそれしか食べるものがないんだ。お年寄りの最大の楽しみは食べることだなんてよく言うけど、その楽しみさえ叶えてあげていないのが今の日本の現状なんだ」

「福祉方面は手を差し伸べていないんですか？」

僕は一つ疑問を感じて、会長に質問した。

「ああ行政の方ね、行政方面ははつきり言つてなあんにもやつてくれない」

「なんにも、ですか」

僕は問い返した。会長の話を聞きながら、僕は厚生省お抱えの福祉関係の嘱託歯科医がいて、そういう治療を行なっているのではないか、とぼんやり想像していた。それを告げると、

「とんでもない」

会長は大きくかぶりを振った。「なあんにも、だ。本当に何にもしてくれないんだよ。命に直結する医科と違つて、そうでない歯科には予算が回らないんだ」

酒が入っているせいか、会長は憤懣やるかたないという表情をあらわにして、『なあんにも』を繰り返した。

「じゃ、どうしたらいいと思う、先生。行政が何もしてくれない、としたら？ さあ、在宅の寝たきり老人の歯はボロボロ、義歯はガタガタ、痛くて噛めない。さあどうする、さあどうする」

会長はしきりに僕に解答を迫った。

「そりゃあ……」

僕はのろのろと答えた。なんだか、とても重たい荷物を背負わされそうな予感にビクつきながらも、どうにか答えを出した。「誰かが、と言うか、どこかの歯科医がやらなくてはいけなんでしょうね」

「そう！」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。